Title	レヴィナスにおけるキルケゴール読解を通じた主体性概念の改鑄について：講演「神人？」における特異な受肉理解をめぐって
Sub Title	L'idée de subjectivité chez Lévinas construite à travers sa lecture de Kierkegaard : Autour de la notion unique d'incarnation dans la conférence Un Dieu Homme?
Author	村上, 暁子(Murakami, Akiko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2013
Jtitle	哲學 No.131 (2013. 3) ,p.153- 180
JaLC DOI	
Abstract	Dans une conférence prononcée en 1968 et intitulée Un DieuHomme?, à l'occasion de la semaine des intellectuels catholiques,Lévinas présente sa conception messianique de la subjectivité, en examinantla notion d'incarnation, conçue dans la tradition chrétiensous la figure de Jésus-Christ. Cette idée est, chez lui, remise en lumièrecomme un "problème" qui comporte deux concepts paradoxaux:"l'humilité" et "la substitution".L'argument semble s'inspirer de sa lecture de Kierkegaard dans lapremière partie des années 1960, marquant le point de convergenceet de divergence entre ces deux penseurs, qui consacrent respectivementleurs efforts à considérer la relation avec la transcendance afinde rétablir la subjectivité humaine. Comment Lévinas métamorphose-t-il la définition de la subjectivité chez Kierkegaard, comme la tensionentre Soi, pour aboutir à une toute autre définition, la substitutionpar moi de tous les autres? Pour montrer le cheminement de lapensée de Lévinas sur la notion de subjectivité, cet article traiterases conceptions de l'existence, de l'humilité et de la substitution.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000131-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese

Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 投稿論文 —

レヴィナスにおけるキルケゴール読解を 通じた主体性概念の改鑄について

— 講演「神人？」における特異な受肉理解をめぐって —

— 村 上 暁 子*

L'idée de subjectivité chez Lévinas construite à travers sa lecture de Kierkegaard: Autour de la notion unique d'incarnation dans la conférence *Un Dieu Homme?*

Akiko Murakami

Dans une conférence prononcée en 1968 et intitulée *Un Dieu Homme?*, à l'occasion de la semaine des intellectuels catholiques, Lévinas présente sa conception messianique de la subjectivité, en examinant la notion d'incarnation, conçue dans la tradition chrétienne sous la figure de Jésus-Christ. Cette idée est, chez lui, remise en lumière comme un « problème » qui comporte deux concepts paradoxaux: « l'humilité » et « la substitution ».

L'argument semble s'inspirer de sa lecture de Kierkegaard dans la première partie des années 1960, marquant le point de convergence et de divergence entre ces deux penseurs, qui consacrent respectivement leurs efforts à considérer la relation avec la transcendance afin de rétablir la subjectivité humaine. Comment Lévinas métamorphose-t-il la définition de la subjectivité chez Kierkegaard, comme la tension entre Soi, pour aboutir à une toute autre définition, la substitution par moi de tous les autres? Pour montrer le cheminement de la

* 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程・特別研究員 DC

pensée de Lévinas sur la notion de subjectivité, cet article traitera ses conceptions de l'existence, de l'humilité et de la substitution.

序に代えて

1968年4月、レヴィナスはパリで開かれたカトリック知識人の会合において「神人？」という題目のもとで受肉の問題を論じた。キリスト教の最重要教理のひとつである受肉をユダヤ人であるレヴィナスが直接扱うのは、生涯においてこの場のみであり、それは極めて例外的なことであった。他方この講演は、第一の主要著作『全体性と無限』（1961年）以降の思索の展開を裏付けるものでもある。講演からは、第二の主要著作といわれる『存在とは違う仕方、或いは存在の彼方へ』（以下『存在の彼方へ』）（1974年）の中心的主題である「身代わり」の主体性概念が既に練り上げられていたことが伺えるが、この概念は『全体性と無限』には見られないものだからである¹。

講演ではキルケゴールの真理観が大きく取り上げられている。そこから、この変遷の時期にレヴィナスはキルケゴールの思想をどのように受容したのかという疑問が浮かんでくる。共通点としては、二人の思想家が共に人間の主体性の復権をめざしていたことが想起されよう。なるほどヘーゲルの観念論が隆盛を極めたなかでキルケゴールが単独者の主体性を擁護したのに対し、レヴィナスは構造主義が台頭した時期に主体性の復権を標

¹ 『全体性と無限』には substitution の語が二度現れる（TI 60/274）が、「代替」と訳されうる意味でしか用いられておらず、主体性の様態と関連付けられてはいない（Con780）。主体性理解として他人たちの「身代わり」の概念が登場するのは、64年10月のタルムード講話「誘惑の誘惑」が初めてであり、この概念はそこで、創造主に対する責任において遡及し得ない過去と結びついた主体に固有の様態として語られている（LÉVINAS, Emmanuel, « La tentation de la tentation », dans le cadre de 7^e Colloque des Intellectuels Juifs de langue française, consacré aux « Tentations du judaïsme », Oct 1964, dans *Quatre lectures talmudiques*, Paris, Minuit, 1968/2005, 107)。

語として掲げ、「他なる人間の人間主義」という思想を展開したことを鑑みるなら、両者の主張の背景は大きく異なっているように思われる。しかし、どちらも主体と超越とのかかわりについて思考し、全体性に還元しえないものとして主体性を擁護した点では一致していた。

但し、主体を真に主体たらしめているものが何であるかという点については、二人の思想家は立場を同じくしていたわけではない。レヴィナスは、神の前に立つ単独者の「実存」ではなく、他人たちとの関係である「倫理」のうちに主体の還元不可能性を見出している。そして、「信仰」における「自己との緊張関係」としてのキルケゴール的主体性概念から着想を得つつも、それを、〈他者〉による自我の審問のうちで「受肉」する「万人の身代わり」としての主体性概念へと改鑄している。なぜレヴィナスは、キルケゴールに反して、「身代わり」という発想を打ち出さねばならなかったのだろうか。キルケゴール読解を通して自らの主体性概念を練り上げてゆくレヴィナスの思考の筋道に光を当てることで、特異な受肉理解にもとづくこの主体性論の狙いを明らかにすることができるのではないかと、との考えから、本稿では「実存」、「遜り」、「身代わり」という三つの概念を軸にレヴィナスのキルケゴール解釈を取り上げる。これによりレヴィナスの主体性論の特異性を浮き彫りにすることが本稿の目標である。

第一節 「実存」の「エゴイズム」批判

戦後のフランス思想界において、キルケゴールは一種格別の存在感をもっていた²。64年4月には、キルケゴール生誕150周年祝いに大規模なコロックが開かれ、その記録はユネスコから『生けるキルケゴール』（1966

² フランスでは30年代から既にキルケゴールの熱狂的受容が始まっているが、レヴィナスが自らの解釈を打ち出すのは戦後であり、論稿としては63年が初めてである（Cf. MOYN, Samuel, « Transcendence, Morality, and History: Emmanuel Levinas and the Discovery of Søren Kierkegaard in France », dans *Encounter with Levinas*, No. 104, Yale French Studies, 2004, pp. 22-54.）。

年) という一冊の本として出版されている。このコロックの発表者にはサルトル、マルセル、ヴァール、ヤスパース、ゴールドマン、ハイデガー（ボフレによる代読）らが名を連ねており、二日間にわたる公開討議にはレヴィナスも出席していた。前年にドイツ語でキルケゴール論を発表していたレヴィナスは、そこで自らの見解を二度ほど表明したが、当人によれば、討議録にはそれらが「発言を歪曲するような形で」（NP111）収録されていた（KV232-234/286-288）³。すぐに訂正を訴えたが原稿の差し替えはなされぬままであったため、レヴィナスは、自らのキルケゴール解釈を正確に伝えるべく、論文集『固有名』（1976年）に63年の独語論稿を自ら仏訳して公表し討議における発言も再収録した。本節で扱う60年代前半のキルケゴール論は、こうした複雑な経緯から世に知られるようになったものである。

コロックでの発言が誤って記録されていたことから窺えるように、レヴィナスのキルケゴール解釈はあまり理解されず、共感を得ることは少なかった。とりわけ、レヴィナスがキルケゴール的「実存」を「エゴイズム」（独原典頁／仏訳頁）（EE172/NP102）として描き出したことは、一面的で不公正だとして現在に至るまで多くの批判を受けている⁴。確かにレヴィナスの議論には、キルケゴールに限らず先人の思想を敢えて批判を喚起するような大胆な仕方でも図式化する傾向が見られる。しかしそれは個人批評の枠を超えて、より広い視野のもとで問題を捉えなおすための方策ではないかと思われる。そこで以下ではまず、63年5月のキルケゴール論「実存と倫理」における「実存」批判の背後に隠された問題意識を垣間見

³ 例えば、他人に対する責任について「この要請は無限である」と語った部分が、キルケゴールにおける「有限性の運動」の趣旨と勘違いされてか「有限である」と記録されている（KV234）。

⁴ 本邦のキルケゴール研究誌においても、「レヴィナスの批判には一面的なところがあることは否めない」（鶴74）、「レヴィナスの批判はキルケゴールの思想にもまた『おそれとおののき』という著作にも公正を欠いている」（本田39）といった厳しい意見が目立つ。

ることで、レヴィナスの主張を精確に捉えることに努めよう。

レヴィナスによれば、キルケゴールが西洋思想にもたらした「実存」の観念は、主体が内面性の深みに「永久に言表しえない秘密」(EE171/NP100)を抱えていることによって、ありとあらゆるものを包括し存在せしめる思惟作用の外に、分かたれて存在する事態を表現している(EE170/NP99)。キルケゴールによれば、主体を苦しめるこの秘密の名は「罪」であり(III182)、自我はこの「肉の内なる棘」(« PfahlimFleisch »)(EE171/NP100)によって自己に釘づけにされることで、単独者として真に「実存」とされる。このようにキルケゴールは、思惟のうちに主体を還元するヘーゲル的観念論に抗して、「罪」の内面性にもとづいて「実存」の還元不能な地位を擁護した。ここからレヴィナスは、キルケゴール的「実存」を、苦悩のうちでの「自己との緊張関係(Selbstspannung)としての主体性」と規定している(Ibid.)。

レヴィナスが批判的眼差しを向けているのは、「罪」によって規定されるこの「実存」が、一般的なものとされる倫理的段階に優越する宗教的段階に位置づけられる、という点である。例えば、『畏れとおののき』(1843)においてキルケゴールは、イサク奉獻という神命を担いながらそれを家族にすら告げえなかったアブラハムの物語から、「神に対する絶対的義務」(III133)ゆえに「倫理的なものの目的論的停止」(III119)がみとめられるならば、神に対する義務について周囲の人々に語ることは出来ず、語る義務も存在しない(III179)という解釈を引き出している。レヴィナスの理解では、このことは、キルケゴール的「実存」が普遍的な法に従って他人と共存する社会における「倫理」とは相容れないものであることを示している。こうした「実存」の情熱は、「たとえ救済の渴望の如き崇高なものであれ」、狂気と紙一重の「主体のエゴイズム」であり(EE172/NP101)、他人たちとの関係から切り離された内面性として特権視される場合には、我々の社会生活を脅かすある種の暴力を孕むためである。こう

した「実存」と「倫理」の乖離を問題視するレヴィナスは、ヘーゲルだけでなくキルケゴールにも抗して、「倫理」を一般的なものならざる他人との関わりとして規定する可能性を改めて問い直すことで、一般的なもの／個別的なものの二項対立図式を乗り越えようとする（EE175/NP107）。

とはいえ、こうした問題提起がキルケゴールの思想そのものから導き出されるとは思われない。多くのキルケゴール研究者が指摘しているように、単独者の「実存」は必ずしも「倫理」と無関係ではないからだ。例えばキルケゴールにおいては、主体的思惟の「間接伝達」の問題として、実存者同士の関わりにおける「倫理的なもの」の重要性が認められているう（鶴66）。「倫理的なもの」という表現は、目的論的停止を要するものとして消極的に使われるだけでなく、主体になるという課題をあらゆる人に命じる積極的な意味でも用いられる（濱田284）。また、キルケゴールの思想を宗教的主体性の称揚と捉えるのではなく、美的なもの、倫理的なもの、宗教的なものとして形象化される複数の要素の相互作用のうちに人間的「実存」を位置づける試みと捉えることも可能であるし、偽名を用いたその多様な著作活動からして根底的な矛盾を含んでいるキルケゴールの主体性論を総合的に理解することは不可能だとする見方もある（Brezis251）。

しかし以上のことが正しいとしてもなお、レヴィナスの批判はその鋭さを失わないように思われる。この点を理解するには、その批判の背後に、存在論的主体性理解一般に対する問題提起、すなわち、他人との関係を捨象して各存在者をその存在との排他的関係のもとで捉える哲学的方法論への批判が存していることに目を向ける必要がある。レヴィナスによれば、自我が存在する仕方に即して捉えられたとき主体性は「エゴイズム」としての相貌を顕わにする。ここで「エゴイズム」という語は「AのためにAのことを心配すること」(die Unruhe von A für A) (EE171/NP101)、すなわち、己の存在について配慮することで各人が存在に対し主格の地位

に立ち、同一者として存続しようとする動向を表現している。問題になっているのは、私が自己同一的な存在者として在ることそのものに内在する「存在論的エゴイズム」である⁵。「実存」の主体の根底に潜むこの自我中心性の構図のうちに、対人的規範の逸脱よりも重大な「エゴイズム」の形態があるというのである。この観点からみるならば、神の面前で自らの罪によって苦しめられる「実存」は、それが自らの内面性の保持に努める形式である（VII65）かぎりにおいて、「自我中心主義／エゴイズム」の枠組みを逃れられていないことになる。この主張は「痕跡」（trace）と「彼」（Il）という新概念を導入した同年9月の論稿でも維持されており、自らの救しを追い求める実存様態が「救済のエゴイズム」（EHH274）と呼ばれ、他人との倫理的関係に閉じた主体性として批判されている。

加えてレヴィナスは、「肉の内なる棘」の如く自我を自己に釘づけにする緊張を一種の「哲学以前の経験」（EE170/NP99）とみなし、実存者が抱える救済への渴望もまたこの「経験」に由来すると分析している。レヴィナスによれば、外界に対して「緊張／期待」（Spannung）の様態に関わる「実存」は、それ自体「存在本質（das Wesen）が自らを産出するひとつの仕方」（EE171/NP101）である。つまり自己への回帰によって存在から自らを分離しつつ、存在の上で自らを確証する「実存」は存在作用の反映にすぎず、存在と存在者との内在的で根底的な癒着のうちに囚われているのである。レヴィナスは、こうした存在との癒着のカテゴリーとしての「実存」という発想を、「異教的源泉」への回帰とみなしている（EE171/NP100）。初期からレヴィナスは、存在作用への埋没という意味における「融即」（participation）の様態によって規定される人間のありかたを「異教」と表現しているが、この語は、匿名的作用として捉えられた存在が、

⁵ この点に注意を喚起したデリダの論述を参照（ED163）。それゆえ「エゴイズム」はハイデガー的現存在の各自性やスピノザ的自己保存の法則のうちにも見出されている（EE173/NP104）。

実存者がそれとの原初的一致を憧憬するような一種の「聖なるもの」と化す状況を表現していると思われる。この点を踏まえるなら、レヴィナスによる「実存」の「エゴイズム」批判は、非人称的存在の自己完結性のうちで主体性を捉える発想への批判でもありと考えられる。

さて、これまで本節では、レヴィナスによるキルケゴール的「実存」理解の背後にある問題意識を確認してきた。それにより、「実存」の「エゴイズム」批判を通じて、レヴィナスが、存在本質のうちなる自我の自己同一化作用のうちに主体の還元不可能性を見出す発想一般を批判していることを確認することができた。この問題意識ゆえに、レヴィナスは、「一切の「他なるもの」を「同じもの」に還元する思惟によっても〈他者〉(der Ander)を還元することはできない⁶という不可能性」(EE175/NP107)が告げられる「倫理」のうちに、主体が還元不可能なものとなる契機を見出そうとするのである。

確かにこうした批判は、純粋な作用としての「存在」を、一切の個別的主体を呑み込む闇の如き脅威 (il y a) と捉える初期からの論点と、「自我」を、そうした様態からの分離を成就する自己同一化原理と捉える『全体性と無限』の主張を踏まえることなしには理解が困難であり、キルケゴール解釈として客観性を有しているとは言えない。ただし、この批判だけがレヴィナスのキルケゴール理解の全てであったわけではない。とかく強烈な批判の方に注目が集まりがちなのこの63年の論稿においても、詳細にみるならキルケゴールの発想を評価している側面も目に付く。例えばレヴィナスは、キルケゴールは誰よりも厳密な仕方です「十字架に架けられた真理と相関的な純粋信仰」(EE173/NP104)の現象学を展開した哲学者であったと述べている。こうした側面に光を当てることで、レヴィナスが「真理」と「信仰」の関係を巡るキルケゴールの考察を評価し、それを自らの主体

⁶ この主張は『全体性と無限』(1961年)から一貫している:「体系を拒むのは、キルケゴールが考えたように私であるのではなく、〈他者〉である。」(TI10)

性概念に反映していることが明らかになるように思われる。そこで次節では、「遜り」の観念に着目し、レヴィナスがどのようにキルケゴール思想を継承したのかという点について考察したい。

第二節 「遜る神」・「迫害された真理」の現象性

先述したように、キルケゴールにおいて主体の主体たるゆえんは内面性の秘密である「罪」のうちに求められているが、この「罪」の概念は「真理」の概念と密接に関連している。キルケゴールによれば、自らが罪の存在であることを実存者が自覚するのは、時間性のうちに出現した永遠の真理にしてその教え手でもある「人格的真理」(Rae214/221)としての「神人」イエスキリストによって教えられることによるのみである。非真理のうちに釘づけにされた存在であるというこの自覚ゆえに、実存者は、真に自らのものであるような真理、「主体的真理」(VIII13)を渴望する。しかしこの「真理」は、観察や推論によって与えられる客観的知識とは異なり、自力では獲得されえない。なぜならそれは、「神人」という「絶対的逆説」(VII203)とかかわる「信仰」によるのみ、受け取りなおしが可能になるものだからである(濱田104)。つまり、神が人となりながらも同時に神でありつづけるという背理なしには、主体の内面性が「真理」と結びつくことはありえないことになる。ここから、キルケゴールにおける「真理」概念が、「神人」への「信仰」の成立可能性の問題から切り離しえないことが見て取れよう。

レヴィナスの見るところでは、この「信仰」の観念は、「現前すると同時に不在でもある一人の〈人格〉との一苦しみ、死にゆくことで自らが救う人々を絶望に委ねるような遜った神(einem erniedrigten Gott)との一〈関係〉」(EE172/NP103)を表現している。「信仰」において「人格的真理」そのものである神は遜っており、それを確実なものとして意識に対して現前させ、客観的に把握することはできないからである。だがそのこと

は、「信仰」が「不確実な真理」という単なる知の墮落態であるということの意味するのではない。むしろレヴィナスの分析によれば、キルケゴールにおいて、「治癒不可能な貧困」ないし「絶対的な飢え」とも呼ばれる「罪」のうちで許しと救済を渴望する「信仰」は、絶対的な疑わしさと共存する確信として、「真理の新たな様相」を告げている（EE172-173/NP102-103）。現前と不在の両義性のうちで、綜合を拒否する矛盾として成立するこの真理の観念は、「迫害された真理」（EE172/NP103）と呼ばれている。

64年のコロックで述べているように、決してそれ自体として露わにされえず、つねに世界の秩序に屈する仕方ではしか顕れえないこの「覆いを取ること（*dé-voilement*）ならざる真理」（NP114）という発想こそ、レヴィナスにとって、キルケゴール哲学の最も斬新な点であった。このように、真理の開示性を強調したハイデガーとの対比のもとで言及されるキルケゴール的真理観は、この時期のレヴィナスにとって、特異な時間性概念である「隔時性」（*diachronie*）を導入する過程で重要な意味をもっていたと思われる。事実レヴィナスは、キルケゴールにおける「迫害された真理」は「二つの時間にまたがって働く」（NP115）と64年に指摘しており、翌65年の論稿「謎と現象」において「隔時性」概念を導入する際にも、「迫害され誤認されるかぎりでのみ自らを啓示するようなキルケゴール的〈神〉の観念を、「現象の位相差なき同時性」を破って時間性のうちに断絶を刻み込む「真理」のありかたとして取り上げている（EHH291-292）。ここからは、キルケゴール的真理観の受容を通じて、「超越的真理」（NP114）がその否認を通してのみ知られるような時間構造をめぐる問いに至るレヴィナスの姿が浮かび上がってくる。

さらにレヴィナスは、キルケゴールにとってイエスにおける「神的なもの

のものが「全面的身分秘匿 (*incognito*)」(EE173/NP103, NP114) のうちで生起するのではないか、という見解にまでつきつめている。これは、何事かが啓示されるやいなや、あたかも何も啓示されなかったかのようになる状況として「遜り」を捉える大胆な解釈であった。そのためこの見解は、一神教の教理にもキルケゴールの啓示理解にも見合っていないとして直ちに反論を受けている (KV300-301/310-312)。確かにキルケゴールは、人間イエスのうちに神自身が肉を取り迫害を受けたという一回的な出来事のうち「十字架に架けられた真理」という「遜り」を見出していたが、それを超越神の顕現一般の問題として論じていたわけではなかった。それゆえ、「遜り」概念を「啓示」一般に拡大適用することで、レヴィナスはここでもキルケゴールの忠実な読解の枠を踏み越えてしまっているようにみえる。

このように「神人」における「遜り」を「啓示」の一形態と捉える解釈は、明らかにキリスト教的発想からは逸脱している。ただしこうした議論は、ユダヤ人であるレヴィナスが受肉の問題を扱うにあたって採用した方法論から帰結していると考えられる。講演「神人？」の冒頭においてレヴィナスは、キリスト教徒でない自らは「神人」概念の究極の意味については無理解であり、それを論じることは出来ないと断っている。むしろレヴィナスの議論の主眼は、〈神たる人〉という概念をひとつの「問題」として捉えなおし、受肉概念の哲学的意義を明らかにすることにある。つまり「遜る真理」としての〈神〉の受肉の問題は、キリスト教の教理とは無関係に、哲学的観点から問い直されているのである。この点を念頭に置きつつ、以下では63年の論稿からこの68年の講演に目を移し、レヴィナスが「受肉」を「啓示」の問題として論じる過程を見ていこう。

ここでのレヴィナス自身の試みは、受肉概念が示唆する多様な意味のなかでもとりわけ二つの逆説的概念の射程を哲学的に吟味することに限定されている。その二つの逆説とは、〈神〉がその能動性によって受難を被る

受動的地位にまで自らを引き下げる「遜り」と、唯一的なものが全人類の代わりになるという「身代わり」である。

〈人-神〉(Homme-Dieu)⁷という問題は、一方では、至高の〈存在〉が自らに課す「遜り」(humiliation)の観念、〈創造主〉の〈被造物〉の水準への降下、つまり、最も能動的な能動性による最も受動的な〈受動性〉への吸収の観念を含んでいる。その問題は他方、〈受難〉(Passion)においてその極限にまで推し進められたこの受動性によって引き起こされるかのように、他人たちのための贖いの観念、つまり、身代わり(substitution)の観念を伴っている。卓越して同一的なもの、交換不可能なもの、すぐれて唯一なるものが身代わりそのものであることになろう。(EN69)

レヴィナスによれば、一見神学的に見えるこれら二つの観念は、どちらも「われわれの表象に属する諸範疇を覆す」(EN70)ものである。つまり「遜り」や「身代わり」の概念によって、表象作用にもとづく思惟の乗り越えが可能になるというのである。例えば「〈神〉の遜り」という発想によって「超越との関係を、無思慮や汎神論の用語とは別の用語で思考することがある程度可能になる」(EN70)という⁸。ここで挙げられた「無思慮」と「汎神論」の二者択一は、超越神を語りだすわれわれの思惟の粹組みが

⁷ 講演「神人？」(Un Dieu Homme?)でレヴィナスは「人-神」(Homme-Dieu)と「神-人」(Dieu-Homme)の二つの表現を用いている。引用文中では既存の邦訳に倣い、ハイフンで接続した訳を用いるが、意味内容としては若干の違いがある。導入部で登場する Homme-Dieu は「神としての人」、つまり神の受肉を受け入れた人間の側に着目する表現であるのに対し、身代わりの主体性概念が導入された後に登場する Dieu-Homme では、むしろ「人としての神」、すなわち身代わりの主体において受肉する神の側に強調点があるように思われる。

⁸ 一方「身代わり」の概念は、ある一定の様態に従うならば「主体性の理解に欠かせないもの」(EN70)とされるが、この点については次節で検討しよう。

表象作用に根ざしているかぎり避けられない思考様式を代弁している。レヴィナスは、神話において神々が人間の姿をとることでその神性を失い、世界に吸収されてしまう仕方を「無思慮」とみなすとともに、神がそれ自身で自足する絶対者として語られることで、世界全体が絶対者のうちに組み込まれてしまう事態を「汎神論」として非難している。いずれにおいても人間と超越神との「対面」が思考しえなくなってしまう、絶対的に他なるものによる「啓示」は不可能とされてしまうからである。

では「遜り」の観念は、「啓示」の問題にどのように光を当てるのか。この点に関し、講演には、それまでとは異なる解釈がみられる。先に見た63年の論稿および64年の発言においては、「啓示」が〈神〉の「全面的身分秘匿」としての「遜り」のうちで生起するという側面に強調点があったのに対し、68年の講演においては、「遜り」が「身代わり」の主体性のうちで成就する「受肉」と連関しているとされ、人間を起点とした「啓示」の可能性が示唆されるようになるからである（EN73）。この変化の内実を詳細に分析することで、レヴィナスが「遜り」の観念から「身代わり」の主体性概念を導き出す思考の筋道に肉薄しうるのではないかとの考えから、以下本稿では、講演に即して「遜り」概念の内容を確認していくことにする。

キルケゴール的「遜り」概念がキリスト教の三位一体の教理に結び付いていたのに対し、レヴィナスの着眼点はむしろ、「遜り」概念をその運動様態に即して捉えることにある。この語はレヴィナスにおいて、顕現するやいなや、既に世界を逃れ出ているような現象性を表現している。レヴィナスによれば、〈神〉はその超越性ゆえに思惟の文脈や意識の時間地平のうちには組み込まれないため、その「遜り」は「参入に先立つ撤退」として生起する。それは「いまだかつて現在であった／現前した（présent）ことのない過去」として〈神〉の退去が刻み込まれる事態を指しているという（EN73）。このとき世界への到来と世界からの退去は分か

ちがたく結びついて「遜り」という一つの現象性を構成している。レヴィナスによればこれは、超越という能動的働きによって「痕跡」(trace)を残す〈神〉に固有の「存在の仕方」(EN71)である。

この超越者の「遜り」の例として常に取り上げられるのが「顔」であることはよく知られていよう。講演によれば、「顔」の概念は、高さ・高潔さと、貧しさ・慎ましさのあいだの両義性のうちで〈他者〉がこの世界に輝き出る仕方を表現している(EN74)。ここで「顔」の「貧しさ」とは、〈他者〉が世界の内在的意味連関のうちに場所をもたない異邦人であり、一切の規定を欠いているという事態を表現している。他方「顔」の「高さの次元」は、63年の論稿「実存と倫理」によれば、「その人について」と「その人に対して」が一致する「責任の二重の運動」によって告げられる(EE176/NP108)。〈他人〉についての「責任」(responsabilité)を〈他人〉に対して負うことにより、ひとは憐憫によってではなく債務者としてその要請に応じねばならなくなるからである。

しかし講演でレヴィナスは、「私の隣人の「顔」のうちでの〈神〉の近さ」(EN73)を「遜り」の「痕跡」と呼び、〈神〉が「顔」へと遜ることで、主体が〈他人〉についての「責任」へと召喚されると述べている。一見すると、「責任」を命じる〈神〉の「遜り」という契機によってこの「高さの次元」は損なわれてしまうようにも思われる。というのも今や主体は〈神〉に対して〈他人〉についての「責任」を負っていることになるからである。しかしレヴィナスによれば、「顔」を通じて「責任」を命じる〈神〉は自らの身分を明らかにせず、その命令はあたかも〈他人〉に由来するかのように発される。つまり〈神〉の「遜り」が、「責任」を命じながらも身分秘匿のままに退去してしまう動態であるがゆえに、〈他人〉との倫理的関係が「顔」との対面として生起するのである。

このように世界に組み込まれることなく世界の秩序に働きかける現象性について、レヴィナスは「遜る者は絶対的に／断絶する仕方

(absolument) 攪乱する」(EN71)と語っている。「釈放される」(s'absoudre) という動詞に従い、レヴィナスが分離の意味で用いる absolu の語が表現しているように、「遜り」における〈神〉の降下はその上昇と表裏一体となっている⁹。顕現が同時に隔たりであるようなこの運動ゆえに、〈神〉は「同化不能な他性」(EN74)¹⁰を失わないのだという。

以上から、絶対的に分離された〈神〉との「隔たり」が刻印される出来事が、同時に、いかなる距離も取れないほどの「顔」との「近さ」でもあるという奇妙な事態が生じることになる。レヴィナスによれば、「顔」は、対象化して把握するための距離すら取れない程に主体に強迫し、「エゴイズム」のうちに存立する自我を告発、迫害する。この「迫害的告発」(EN75)においては、自我は認識主観としての地位を奪われ、自らが犯しうのような一切の過ちに先だつ「責任」へと召喚される。「顔」との対面は、主体が否応なく他人たちの苦しみと過ちを担わされ、彼らの過失にまで「責任」を問われ、その咎で迫害を受ける〈受難〉(EN67)の出来事なのである。この意味で、「顔」による自我の「強迫」は、〈他者〉による「審問／巻き添え」(mise en cause) (EN75)の様態をとるものである。

一見この「審問」という出来事は、近代的主体像の第一条件である主観の地位から自我が放逐される疎外状況に他ならないように思われる。だがレヴィナスにおいて、この出来事はむしろ新たな「自己」の誕生と捉えられている。「審問」において自我は、「主格」(nominatif)から「対格／告発される者」(accusatif)の地位に置かれた「自己」(soi) (EN75)へと連れ戻される。ここでは「他人たちの苦しみと過ちが課す重みに曝される

⁹ こうしたレヴィナスの「遜り」理解には、降下すると同時に超越する〈神〉による万物の連続的創造の業を論じたラビ・ハイームの影響がみられるが、紙幅の都合上ここでは触れない (Cf. Rabbi Haim de Volozine, *L'âme de la vie*, traduit de l'hébreu par B. Gross, s.l., Editions Verdier, 1886/2006.)

¹⁰ 「秩序を攪乱する「他性」(l'altérité)が直ちに秩序のうちへの「融即」(participation)と化さないためには(…), 顕現の遜りはすでにして隔たりでなければならぬ。」(EN73)

という事実が〈自我〉の自己-自身を定立する」(EN76)、つまり「顔」による「迫害」という出来事は、単なる「自己」の様態や属性ではなく「自己」それ自身を構成する作用であることになる。「一者が他者のために／の代わりに (pour) 苦しみを担うこと」を「身代わり」と呼びうるとすれば、ここで「自己」は「身代わり」によって成立していると言える。

「顔」の切迫において、主体は、「実存」として自らの内面性のうちに閉じ込められることも、「倫理」のうちで一般化されることもなく、〈他者〉に応答すべく呼び求められた「自己」として新たな主体性を得る。この意味で、キルケゴール的「実存」が「倫理」の一般性と対比されていたのに対し、レヴィナスにおいて、「審問」における新たな主体性は、自我と自己との緊張関係ではなく、他者による自己の一般化でもない、他者の「身代わり」の様態として規定されていると言えよう。

これまで見てきたように、「遜り」概念は、レヴィナスにおいて、身分秘匿のままに超越する〈神〉の認識における把握不可能性を告げるのみならず、自我が主観として他なるものを知の内部に包摂する認識の枠組みそのものが転覆され、あらゆる他人を支える「自己」が新たに叙任される出来事として捉えられている。このように「遜り」をキルケゴールとは別様に規定することによって、レヴィナスは「遜り」論から「身代わり」の主体性論へと移行するのである。次節ではこの「身代わり」としての主体性概念に着目し、レヴィナスが、キルケゴールとは別の仕方で、人間の主体性のうちに還元不可能性を見出す際の論理を明らかにしよう。

第三節 「身代わり」概念による主体性の復権

前節では68年の講演におけるレヴィナスの第一の主張、すなわち、「遜り」の観念によって超越について表象とは別の枠組みで思考しようようになる、という見解を吟味してきた。本節では第二の主張、「身代わり」の

観念が現代において主体性の復権を可能にする、という見解を理解することが目指される。まずはこの主張を引用しよう。

〈神-人〉(Dieu-Homme)の観念は、〈創造主〉の被造物へのこの実体-変化/変質(trans-substantiation)において、身代わりの観念を確証している。同一律に対するこの打撃の射程はある程度—ただし、まさしくどの程度そうなのかを理解すべきだが—主体性の秘密を表現したのではないが、観照以外の実践を精神に認めることなく、意識に還元された人間の人間性を、客体的諸構造の単なる鏡に帰してしまうようなわれわれの時代の哲学のうちで、身代わりの観念は主体の復権を可能にするのではないか。この主体の復権は、その本性主義(naturalisme)のうちで「人間的なるもの」(l'humain)の特権をすくさま見失ってしまった本性主義的ヒューマニズムがなしえなかったことなのであるが。(EN74)

主観として一切のものを意識のうちに再構成する自我論からはじまり、意識の反映であるのみならず下部構造でもあるような全体性としての無意識や社会構造、言語の分析へと進んだ近現代の哲学潮流にあって、キルケゴール言うところの主体性の秘密は見失われてきた、とレヴィナスは言う。このように人間の人間性が意識に還元され、次いで意識もまたそれを包括する全体性へと集約されるなかで、人間の内面性に目が向けられなくなる事態を、レヴィナスは「近代の反ヒューマニズム」(EN76)という大きな枠組みで捉えている。キルケゴールが近代における多識ゆえの内面性の欠如について嘆いていた(IV451)ように、レヴィナスも同時代の哲学的状況に対し同様の懸念を抱き、全体性のうちなる主体の疎外や埋没の危機を克服しようとしていたのである。

しかしレヴィナスはキルケゴールと同じように主体性を擁護したわけで

はない。先に見たように、その主体性理解は明らかにキルケゴールの発想とは異質のものであった。例えばキルケゴールにおいて、自我を自己へと釘づけにし、苦悩のうちで真の内面性の次元を開くのは、最終的には人間に固有のものとして各人が背負っている「原罪」であった。それに対しレヴィナスは、他人たちの過失にまで「責任」を問われ、それによって苦しめられる「受難」の出来事のうち主体性を位置づけている。ここで主体性の中核に据えられるのは、人類全体に背負わされる「原罪」ではなく、他人たちに対する罪および他人たちの罪の「代理苦」である。この意味で、レヴィナスにおける主体性は、各人の様態ではなく、万人の代わりに「責任」というメシア（救済主）的役割を担う者のありかたとして規定されていると言える。

この両者の立場の違いは、第一に、先の引用でも言及されている本性主義の放棄という点に起因しているように思われる。キルケゴールとは異なり、レヴィナスは二度の世界大戦を経験し、徹底的な主体性批判の後に主体性の復権という議論を展開した。それゆえ、それ自身の目的として存立する人格概念の存在論的根拠に疑問が投げかけられ、万人共通の本質として人間性を思惟する本性論の限界が示されたこの「反ヒューマニズム」の時代の教訓は、レヴィナスの「身代わり」の主体性という発想に深く刻まれている（EN76）。ある人種に属するという理由による大量虐殺が法的に正当化されるような近代国家が現に存在した以上、不可侵の人格といった形而上学的主張はもはや何の意味も持たないのではないか。こうした深い懷疑の念ゆえに、レヴィナスは人間本性論や形而上学的主体規定とは別の仕方主体性を描き出そうとしているように思われる。

先述したように、「身代わり」概念は、万人の代わりに罪を担う使命への「選び」という発想と結びついている。レヴィナスによれば、万事と万人に対する「責任」は、「顔」の強迫的「近さ」における謂われなき迫害として、引き受けるより前に課せられるものであった。この意味で、「身

代わり」とは、「一切の決断に先だって〈世界〉についての全責任を担うよう選ばれた者」(EN71)によって生起する事柄であると言える。しかし、超越神が〈他人〉の「顔」のうちに遜ることで命じるこのメシア的使命は、「遜る神」の身分秘匿ゆえに、いかなる保証もありえないものでもある。つまりそれは、現に「責任」に応じてしまっている者にとってのみ「超越的真理」であるような「選び」であって、客観的真理ではないのである。この意味で、メシア的「責任」は、それがこの「私」によって担われているときにのみ真実であるような「主体的真理」であるといえる。

この論理ゆえに、「万人の身代わり」は、他人のうちには見出されえず、この「私」においてのみ成立するものとなる。レヴィナスは、他者と自己とのこの不均衡ゆえに、「私」は普遍性の法則が適用されない例外者となると述べている。こうして、自らの存在の上に安住する「主格」から追放され、「責任」に応じて万人の代わりとなる「対格」としての新たな「自己」に結び付けられることで、主体は「例外的唯一性」(EN76)を帯びる。ここには、「責任」においてあらゆる他人と結びつきながらも、同時にこの「責任」において唯一的なものとなる万人の代わりの唯一者という発想がみられる。つまりこの「私」にしか担うことのできない唯一無二の「責任」によって、主体は還元不可能な唯一者となるのである。キルケゴールの主体性論においては各人が単独者として真に「実存」することが問題であったのに対し、レヴィナスにあっては、主体性の核をなすこの「責任」の非対称性ゆえに、いかなる一般化も免れるこの「私」という唯一者が問題となっている。

このような例外的唯一者の主体性は、いわゆる自我の自己同一性と何が異なるのか。レヴィナスによれば「身代わり」概念は、主体に固有の本質や属性を示す語ではなく、〈他者〉との結び付きのうちで主体が生起する働きを表現している。そこでは先に「エゴイズム」の存在論的様態として取り上げた「主格」の自己同一性は変容させられ、無限に再帰する「責

任」のうちでその都度「対格」に置かれる者の唯一性へと化す。このとき自我は〈他者〉によって絶えず課せられ無限に増幅するメシア的「責任」を支えきれず、その自己同一性は解体されるという (EN75)。ここにはもはや、様々な変容を被りながらも一貫して自らを〈同じもの〉に保つ自己同一性の余地はないのである。この意味で、人間の主体性を擁護しているとはいえ、レヴィナスの議論は各々の自我主体の自己同一性の擁護とは程遠いものであると言える。

こうした試みを通じて、レヴィナスは、各人の本質としての人間性や、自我主体の本来的構造としてではなく、多数者の結びつきのうちで生起する「人間的なるもの」の様態として、主体性を語りだしているように思われる。じっさい普遍的「人間」概念ではなく、「一にして唯一なるもの」としての「人間的なるもの」について語るということは、同年68年の論稿「人間主義と無-起源」において、人間性の復興の名のもとにレヴィナスが自らに課した課題でもあった (HA77)。このことから、こうした着想はレヴィナスの人間主義思想を貫く根本主張であったと考えられる。

レヴィナスの議論によれば、主体を唯一者たらしめるのは、人間的個体が有する何らかの特性ではなく、〈神〉の「遜り」によって課せられる「万人への責任」の代替不可能性である。この意味で、ルネサンス以降の西欧哲学において主要な流れを築いたヒューマニズムと同じ語を用いているものの、レヴィナスの人間主義は単なる人類愛にはとどまらない射程を有していると言える。というのも、ここで「人間的なるもの」は〈神〉の「遜り」と「受肉」の運動のうちで捉えられているからである。超越神との関係に即して規定される、〈他人〉との非対称的な関係性のうちなる主体性のみが「人間的なるもの」と呼ばれる点で、レヴィナスの人間主義はいわゆる人類信仰や人間中心主義からは区別されるのである。

レヴィナスがキルケゴールとは別様に主体性概念を規定した背景には、第二に、この「受肉」をめぐる考察が存していたと考えられる。そもそも

キルケゴール的主体性概念の根幹にあったのは、「神人」イエスキリストにおける受肉の逆説であり、その逆説的真理に対する「信仰」のうちでみずからの「罪」と向き合う単独者のありかたであった。それに対しレヴィナスは、〈神〉は〈他人〉の「顔」に遜ることで「責任」を命じながらも、そこから絶対的に分離すると主張している。しかもこの分離にもかかわらず、「顔」の切迫ゆえに生じる「自己への放逐」(EN75)としての「身代わり」は、「受肉」と呼ばれているのである。

ここで「受肉」という語は、単に、精神としての自我が苦しみを被りうる身体のうちに宿るという意味で用いられているのではない。むしろ先に引用したように、この語は、「身代わり」の出来事を通じて、創造主が被造物のうちに「実体-変化」(EN74)する運動そのものを表現しているとされる。しかしながら、人間的主体性のうちに〈神〉が「実体-変化」しつつも、その完全なる「身分秘匿」を破ることなく超越的他者であり続けるとは一体いかなる事態を指しているのだろうか。この点を理解するにあたり、本稿では、「遜り」が同時に神自身の絶対的分離でもあるような「啓示」の観念が、この講演において「啓示の最初の言葉は人間から到来せねばならない」(EN73)という主張と結び付けられている点に着目した。「受肉」の問題を人間を起点とした「啓示」の可能性という論点と結びつけることで、レヴィナスが、「神そのものが人となる」というキリスト教的発想とは異なり、「神の言葉が命じられ、応答する主体性が生起する」こととして「受肉」を捉えていることが浮き彫りになるように思われるからである。この発想の転換により、レヴィナスにおいて「受肉」の問題は、絶対的に他なるものであり続ける〈神〉の「啓示」がいかにして成し遂げられるのか、という問いとして立てられることになる。

その考察は、〈他者〉の「意味作用」を記号表象としての他者概念の指示作用とは別の仕方でも思考するという、論稿「他者の痕跡」(1963年)および60年代前半の諸論稿における議論へと結びつく。レヴィナスはこの

論稿で、〈他者〉の「被り」を「責任／応答可能性」(responsabilité)へと転じせしめる命令の通達作用の構造について詳細な議論¹¹を展開している(e.g. EHH273/282)。「受難」という徹底的受動性から「応答可能性」へと転じる主体性のうちに、文脈に即して得られる意義や諸記号の構造化によって指示される意味内容には還元されることのない「存在のうちなる一つの命令(ordre) および一つの意味(sens)の素描」(EN76)が存している、と講演でレヴィナスが述べているのは、これらの考察を踏まえてのことと思われる。この点を鑑みるなら、人間を起点とした「啓示」としてレヴィナスが思い描いているのは、〈他者〉によって被る受動性から〈他者〉のために応答する可能性へと差し向けられる主体性の動向であると推察できる。そして〈神〉の「受肉」とは、レヴィナスにとって、このようにして命令が通達されることで「身代わり」の主体性が成立する事態そのものを表現していると考えられるのである。

この枠組みにおいては、〈神〉の「受肉」の可能性と、類を超越する唯一者としての「人間的なるもの」、すなわち、いかなる全体性にも還元し得ない主体性が成立する可能性の双方が密接に関連している。68年の講演でこの点について詳細な議論が展開されている訳ではないが、人間を起点とした「啓示」という発想の背後には、この二つの可能性を結びつける「意味」をめぐる考察が見いだせるように思われる。ここには、後に『存在の彼方へ』で「預言」(prophétisme)や「証言」(témoignage)、「語ること」(le dire)と「語られたこと」(le dit)といった概念を導入して語りだされる意味論の骨格が先取りされているように見える。そこで最後に、人間的主体性における「啓示」の意味作用という問題について考察することにした。

¹¹ この議論については別稿で考察を試みた(「レヴィナスにおける〈彼〉の人称的秩序による他性の意味論—デリダの批判をめぐって」、『フランス哲学・思想研究』, 第17号, 日仏哲学会, 2012年, 東京, pp. 142-150)。

さて、講演でレヴィナスが呈示した「身代わり」の主体性という発想は、主体を「責任」に任命する超越者の関与を「一度たりとも現在であった／現前したことのない過去」(EN73)に見出すものであった。この「断絶せる過去」ないし「記憶不可能な過去」は、〈無からの創造〉以前と重ねて語り出されている。〈神〉の創造の業が、被造物から遡って時間性のうちに取り込むことのできない地点にあるように、「身代わり」として主体性を成立させる命令もまた、決して表象／再現前化 (représenter) しえない地点にある。このようにレヴィナスは、世界内に存在する神に対する関係性とは異なる、被造物から創造主への関わりの特異性に着目して、人間を起点とした「啓示」のありかたについて議論を展開している。

例えば講演でレヴィナスは、人間を起点とした「啓示」の例として、古代ユダヤ教の祈りの典礼における、「〈神〉に対して祈るときには、与えられたものについて感謝するのではなく、感謝の祈りを捧げうることにまず感謝せねばならない」という規則を挙げている。なぜそうせねばならないのかというと、創造主の側から被造物への働きかけがなければ、〈神〉の超越性ゆえに、そもそも人間は〈神〉に対して祈ることすらできないだろうからである。ここで、祈りを捧げうることに感謝する祈りは、〈神〉を表象することなく、その創造の業を讃えている。つまり、自らの被造性を告白する人間の祈りによって、「記憶不可能な過去」において超越神が被造世界に到来し、また退去したこと（過越）が「啓示」されるのである。

同様の構造は、「預言」にも見いだせる。それは、〈神〉が語ったことを聴いてその内容を表現する単なる記述としては説明しえないものである。確かに、〈神〉によって語られた内容を反復する言語表現としての預言は、聖書の表現に見られるように、記号の表象作用に基づいて意味を得ている。しかしこうして「語られたこと」のうちには、〈他者〉がこの「私」に宛てて語りかけるという超越の「方位」(sens)としての「意味」が反映されえない。それゆえ「預言」は、記述された途端に、それを語ったの

が絶対者たる〈神〉であり、語りかけられた宛先がその「預言」を発する「私」であることを伝達しえなくなるだろう。かくして「超越的真理」としての「啓示」は、真に超越する〈他者〉から到来したものであることを客観的に証明できない、疑わしい言説に紛れてしまうことになる。この状況は、超越者がその意志を伝達する「啓示」が、自らの出自を明らかにしない〈神〉の「全面的身分秘匿」のうちで生起する事態を告げている。

しかしレヴィナスによれば、「預言」の意味作用はこの点にのみ存している訳ではない。超越者と結びつけられた者として応答する人間的主体性のうちで、〈神〉がこの「私」へと向けて「語る」という「方位」にもとづく「意味」が伝達される別の仕方があるのである。先に論じたように、「顔」における〈神〉の「遜り」がこの「私」へと向けられた命令の通達であり、この「私」を「〈他者〉のために／代わりに」選ぶ業であることが告げられるのは、「身代わり」の主体性においてのみであった。ここでは、「私」が「身代わり」としてあらゆる他人たちへと向けて応答する出来事そのものが、メシア的「責任」の通達という「啓示」が成し遂げられたことを確認する。この意味で、「預言」の業が成し遂げられるのは、〈神〉によって「語られたこと」を表現するときではなく、〈神〉の超越の業の「作品」そのものとして主体性が生起し、かくして〈神〉が「語る」ということの「意味」が証しされるときであることになる。

以上から、他人たちの代わりに罪を担うべく「責任」に応じる限りにおいて、主体性は、そこにおいて「超越的真理」が顕現する「啓示」の場たりうるというレヴィナスの主張が明らかになる。つまり、〈他者〉のために／代わりに「〈世界〉についての全責任」(EN71)を担う「身代わり」の出来事は、主体を還元不可能な唯一者とすると同時に、〈神〉の命令の結実としての「受肉」たらしめるのである。この意味で、レヴィナスにおいては、「人間的なるもの」としての主体性が成立する可能性と〈神〉の「受肉」の可能性が、ひとしく「私」による「責任／応答可能性」にか

かっていると言える。

本節における考察から、レヴィナスの主体性論が、キルケゴール的主体性概念を「身代わり」としての主体性概念へと改鑄することで、新たな人間主義思想へと歩を進める試みであったことが浮き彫りになった。以上のように解釈するならば、レヴィナスの議論は、一般的な主体性論とは趣が異なるものの、フランスにおけるキルケゴール受容や、人間主体の意味についての解釈学的探求の流れと無関係に生じてきたものではないように思われる。むしろレヴィナスは、キルケゴール以降の主体性の意味の探求を踏まえた上で、それとは別の仕方では主体の復権の可能性を模索していたのではないだろうか。

結語に代えて

レヴィナスは、68年の講演「神人？」において、63年の論稿「実存と倫理」の論点を再び取り上げつつ、キルケゴール的「実存」の主体性とは別の仕方では規定されるメシア的「身代わり」の主体性概念を呈示した。先に見たように、「実存」と「倫理」の関係について異論を唱え、「遜り」に伴う神と人間のあいだの関係性の変化についても別の主張を展開するレヴィナスの議論は、キルケゴールの忠実な解釈というよりも、いわばその換骨奪胎とも言うべきものであった。

とりわけ両者の主体性理解のあいだの隔たりを浮き彫りにするのが「受肉」概念の捉え方である。レヴィナスは「神人」を、客観的には確証不可能な仕方では〈神〉の命令を担う人間的主体性として語りだしており、「断絶せる過去」からこの世界へと到来し、この「私」に「責任」を通過して「万人の身代わり」たらしめる〈神〉の言葉の働きを「受肉」と呼んでいた。このように、「受肉」を創造の業や啓示における超越の運動に連なる事態と捉えている点で、レヴィナスの議論は、〈神〉の「聖潔性」(sainteté)、すなわち、その分離の絶対性を厳密に保持してきたとされるユダヤの伝統

を継承するものである。その意味で、この講演は結果的に、キリスト教的三位一体論とユダヤ的「選び」の思想のあいだの差異を際立たせ、後者の発展形として自らの主体性論を位置づけるものとなっていると言える。

しかしながら、キリスト教とユダヤ教のあいだの隔たりと近さを意識しつつ、教条主義的神学とは別の角度から「受肉」の問題を掘り下げたレヴィナスの講演は、同時に、この二つの精神的伝統のあいだの対話の豊饒さを示す事例たりえているようにも思われる。大戦後苛烈なキリスト教批判を展開していたレヴィナスが、この時期から積極的に交流の場に足を運び、キリスト教的諸概念の再規定に取り組んでいた事実を鑑みると、二つの伝統のあいだの緊張関係が、レヴィナス自身の思想のうちにいかに反映されているのかという疑問が浮かび上がってくる。もはや詳細な考察を展開する余地はないが、少なくともレヴィナスのキルケゴール論は、キリスト教思想が何らかの形で彼の発想の源であったことを示唆している。この点を想起し、キリスト教徒との対話の場であった講演や論稿の数々を取り上げなおすことは、ユダヤ的思想家として語られることの多いレヴィナス像の修正にもつながるのではないかと考える。

文献及び略記法

本文中で参照した文献の省略記号は、以下に省略記号：文献詳細と表記する。引用文中では、原文のイタリック部分の翻訳には下線、大文字の単語には〈 〉を付し、中略は(…)と記す。訳語は各種邦訳を参照しつつ拙訳を提示した。

レヴィナスの著作

TI: *Totalité et Infini, Essai sur l'extériorité*, Hague, Martinus Nijhoff, 1961/4^e éd. 1984; **EE:** « Existenz und Ethik », dans *Schweizer Monatshefte*, mai 1963 (N°43), pp. 170-177/**NP:** « Existence et Éthique », traduction du ce texte allemand en français par E. Lévinas, dans *Noms Propres*, Montpellier, Fata Morgana, 1976; **KV:** *Kierkegaard vivant*: Colloque organisé par l'Unesco à Paris du 21 au 23 avril 1964, Gallimard, 1966; **EHH:** « Trace de l'Autre » [1963], « Enigme et phénomène »

[1965], *En découvrant l'existence avec Husserl et Heidegger*, Paris, J. Vrin, 2^e éd. augmentée 1967/4^e éd. 2006; **EN**: « Un Dieu Homme? », reproduit d'un exposé lors de la Semaine des intellectuels catholiques, mars 1968, dans *Qui est Jésus-Christ « Recherches et Débats »*, 1968 (N°62), pp. 186-192, recueilli dans *Entre Nous, Essai sur le penser-à-l'autre*, Paris, Bernard Grasset, 1991; **HA**: « Humanisme et An-archie » [1968], originellement paru dans *Revue internationale de philosophie*, dans *Humanisme de l'autre homme*, Paris, Fata Morgana, 1972.

キルケゴールの著作

本文中の参照はすべて下記邦訳の全集が底本とする『キエルケゴール全集』第二版 (*Søren Kierkegaards Samlede Værker*, udgivne af A. B. Drachmann, J. L. Heiberg og H. O. Lange. Anden Udgave, Kjøbenhavn.) の II (「不安の概念」), III (「畏れとおのき」「受け取りなおし」), IV (「哲学的断片」) VII (「後書」) の巻数および頁数を付した。

【邦訳】『キエルケゴール著作全集 原典訳記念版第三巻(上)(下)』, 大谷長監修, 創言社, 2010年。『キエルケゴール著作全集 原典訳記念版第六巻／第七巻』, 大谷長・訳, 創言社, 1989年。

【独訳】*Gesammelte Werke und Tagebuecher/Der Begriff Angst* (2003), *Philosophische Brocken* (2003), *Furcht und Zittern* (2004), *Abschliessende unwissenschaftliche Nachschrift zu den Philosophischen Brocken* (2004), übersetzt ins Deutsche von Emanuel Hirsch u.a., Hamburg, Grevenberg Verlag.

その他

Brezis: BREZIS, David, *Levinas et le tournant sacrificiel*, Paris, Hermann, 2012; **Con**: CIOCAN, C et HANSEL, G (ed.), *Levinas Concordance*, Dordrecht, Springer, 2005; **ED**: DERRIDA, Jacques, « Violence et métaphysique. essai sur la pensée d'Emmanuel Levinas », dans *L'écriture et La différence*, Paris, Seuil, 1967; **Rae**: RAE, M.-A., *Kierkegaard's Vision of the Incarnation: By Faith Transformed*, Oxford, Clarendon Press, 1997; **鶴**: 鶴真一「他者へのかかわりとしての言語: キエルケゴールとレヴィナス」, 『新キエルケゴール研究 第二号』, キエルケゴール教会, 2002年; **本田**: 本田誠也「信仰における隣人の他性: レヴィナスによるキエルケゴールの宗教性批判に答えて」, 同書; **濱田**: 濱田侑子, 『キルケゴール 主体性の真理』, 東京, 創文社, 1999年。

レヴィナスにおけるキルケゴール読解を通じた主体性概念の改鑄について

付記: 本稿は、2012年6月30日の実存思想協会での口頭発表「レヴィナスのキルケゴール解釈による主体性概念の改鑄について—講演「神人？」にみる「遜り」と「身代わり」の概念—」の内容を修正したものです。発表時及びその後に貴重なご意見を賜った方々に深謝いたします。